４人の女性と田舎の家で大乱交　巨大組織に追われる主人公を田舎に住む４人の女性がかくまう

川木（かわき）は大雨の中、飛び散る水たまりにズボンの裾をビショビショにしながら歩道を走っていた。幹線道路を走る車に水しぶきをかけられながら。

巨大組織に追われているのだ。

約束を破り３人を殺めた。

血眼で川木を追いかけている組織。川木はタクシーを拾うと即座に運転手に告げた。

「とにかくどこか遠くへ」

持ち金を全てはたいてでも逃げたかった。ひたすら恐怖心に突き動かされ。

とにかく田舎田舎へ向かってくれ・・・・と。

そして我に返ると、川木は田畑の広がる田舎道を歩いていた。

ポケットにはもう何も入っていない。バッグも何も持たず完全な“から身”

の手ぶら。

まだまばらに雨は降っている。日はもうすっかり暮れた。

覚束ない足取りで川木は一見の家の軒先に立ちすくんだ。

そこは４人の女性が住む家だった。

秋の終わりはとても肌寒い。まばらに降る雨がみぞれに変わりそうなほど。

十分ほどが経っただろうか、家の前に不気味たたずむ一人の男に住人の女性が気づく。

家の前には広大な畑が広がっている。

汗か雨のしずくか分からないびしょぬれでみすぼらしい恰好の川木はすがるように玄関から出てきた女に言葉にならない言葉で懇願する。

川木は４人に拾われるように家の中へ入った。

暖炉の前のテーブル椅子に座り、４人は川木の話を聞く。

「３人！？？３人も殺したの！！？」

４人の女性からは俗っぽさが感じられない。どこか聖人っぽいというか、純

粋を極め、世を悟っているような雰囲気を漂わせている。

川木はここまでの経緯を全て話した。

「はい。もう取り返しはつかないんです・・・」

ため息をついて目をこわばらせる川木。

何せ組織は巨大。監視カメラ一つで足がつくほど。とにかく人ごみをなるべく避け、逃げてきたのだと話した。

４人の女性はこの家で農業と牧畜を営み、自給自足をする田舎人。

牧歌的な生活はここまで心を豊かにするものなのよ、と川木の心を落ち着かせるように話した。４人はとても穏やかで優しかった。

おびえる川木に、日々の穏やかな生活を話す。こんな生活を私たちはしているのよ・・・・と。

川木は安らぎを取り戻していった。

会話は進む。次第に川木は一つの疑問を抱いた。

女性たちを見ると、まだ肌の張りがあり健康的で若い。

こんな若い女性たちがどうしてこんな生活を送っているのか？刺激がないと言えばそれは決して嘘ではないだろう。

すると、その疑問を汲み取ったかのように４人の１人からこんな言葉が出た。

「私たちは俗世を捨てたんです」

聞くと、４人とも男女関係を主な理由に、多大な傷、苦心を重ねてきたものばかりだった。

人生には不遇が存在する。風貌とは別に、内心はつらい経験を重ねてきたということだった。

女としての自分をあきらめ、薄汚れた俗世を離れ自然と戯れる心を信条とする生き方にいわゆるシフトチェンジしたということだ。

一方で川木にも誓いというものはあった。それは組織に心を預けるということ。川木の所属していた組織は一般的に言う悪の組織。身を預ける、肉体を、心を、魂を。もはや売る、に近いのかもしれない。そうすることが川木の誓いであった。もう出られない、と。約束を破ることは罰を受けることを意味する。

それはどれほど凄惨なものなのか。

５人は家の外へ出た。

雨は止み、限りなく黒に近い紺色の夜空には薄れかかった月が浮かんでいた。

庭に植えられた花を見て川木が４人を覗うように見る。

「こうして花を植えて、植物を育て、自給自足をする。牛を飼って牧畜をやって。そういう人生を選んだってことですか・・・？」

４人はゆっくりと頷いた。

―――――― 体験版は以上になります。――――――――――――――――――――